

Title	法顯『仏國記』の南海航路考・(上)
Sub Title	The journey of Fa-Hsien from Tamluk to Ch'ing-chon (牢山) in fifth century (I)
Author	池永, 佳昭(Ikenaga, Yoshiaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.3 (1981. 12) ,p.81- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19811200-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法顯『仏國記』の南海航路考・(上)

池 水 佳 昭

目次

一、序

二、古代中世の南海交通路

(1) 扶南時代の航路

(a) 扶南経由路 (b) 閩婆経由路

(2) 室利仏逝・三仏齊時代の航路

三、法顯『仏國記』の本文 (以下卷下)

四、本文の考察

五、むすび

一、序

途中、大風にあい漂流し、慘苦をなめたが、やっと耶婆提という国に到着した。耶婆提国（ジャワ島と思える）に五ヶ月滞在し、義熙八年（四一一）四月ここを発し、また難航を続けてその七月に山東の長広郡不其県牢山の南岸、即ち今の青島の東、勞山の下に帰りついた。それから翌義熙九年（四一三）南京に入り、諸師にもたらすところの經律を示し、十二年（四一六）の冬に本稿で考察する『仏國記』一巻を書き上げた。この書は始めて僧祐の『出三藏記集』に『仏遊天竺國記』一巻として著録され、其後『高僧法顯伝』、『法顯伝』等の名で呼ばれているが、唐以後専ら『仏國記』の称が行なわれている。⁽¹⁾

本稿では、(1)法顯が多摩梨帝国を出航し中国の牢山まで如何なる航路を通り、またどのような国に滞在したか（すなわち、耶婆提国の位置）、そして(1)法顯が通った航路と当時の定期貿易航路との関係はどうなっていたか、という二点を中心と考えてみたいと思う。

(Tāmalitti, Tāmraliputi) から船に乗り師子国（セイロハ島、現在の Srilanka 國）に至り、一年間滞在して帰路についた。

法顯『仏國記』の南海航路考・(上)

一、古代中世の南海交通路

法顯は北インドのガンヂス河口に位置した多摩梨帝国を出航し、師子国（セイロン島）、耶婆提国をへて揚子江の北、青州に至つたのであるが、法顯がどのような航路を通過したのかについては『仏國記』の記述のみからは確かにないように思える。そこでその航路を知る為に、まづ古代・中世の貿易主要路について考えてみたいと思う。と言うのは、それら的主要路を考えることにより法顯の時代の貿易航路が推定可能ではなかろうかと思えるし、法顯の通過した航路自体についても知り得るのではなかろうかと思えるからである。

(1) 扶南の時代の航路

五世紀・法顯の時代に南海地方の中継貿易国家的性格を持つ国としては、ヴェトナム中・南部の林邑国（Champa）、カンボジア地方の扶南国、マレー半島中部の狼牙脩国、それにジャワ島の闍婆国等があつたと思えるが、それらのうちの代表的な国は扶南国と闍婆国ではなかつたろうかと思われる。そしてインド諸国から中国、たとえば廣東へ行く場合は、

(1) 扶南経由の航路

- 1 多摩梨帝国（ベンガル地方）→マレー半島（横断）→扶南（→林邑→交趾）→廣東
- 2 インド東岸・師子国（セイロン島）→狼牙脩国（マレー半島中部）→扶南→廣東

(2) 闍婆経由の航路



扶南国についてはペリオ氏はじめ多くの研究があり、中国史料では『南齊書』、『梁書』等にまとまった記述がある。扶南国は紀元後一世紀頃に建国されたようで、六世紀の後半になると扶南の北方に真臘国が起り、崩壊の道をたどる。真臘に亡ぼされるまではインド与中国の間の中継貿易国家として繁栄していたよう思える。それはカンボジアの南端オケオにおける考古学的発掘からも明らかになつた。

扶南と北インドとの間の交通路に関しては『梁書』（五十四）、中天竺の条に次の記述がある。

- 漢和帝時（八八一—〇五年）天竺數遣使貢獻。後西域反叛遂絕。至桓帝延熹二年（一五九）、四年（一六一）頻從日南徼外來獻。魏（二二〇—二六五年）晉（二六五四—二〇）世絕不復通。

唯吳時（二二二—二八〇年）扶南王范旃遣親人蘇物使其國。從

扶南發投拘利口、循海大灣中正西北入歷灣迥數國可一年余到天竺江口。逆水行七千里乃至焉。天竺王驚曰、海濱極遠猶有此人即呼令觀視國內。仍差陳宋等一人以月支馬四匹報旃遺物等。還積四年方至。其時吳遣中郎康泰使扶南及見陳宋等具問天竺土俗、云仏道所興國也。……

…の文によると、後漢の和帝の時に天竺⁽¹⁾から使節が數回西域をくてやつて來たが、のちに中央アジアの反叛（戦争）の為にとだえてしまひ、今度は桓帝の時にベトナム中部（日南徼外）から陸路で何度もやつて來たという。この場合は海上ルートを利用したのである。ただ吳の時代にインド北部と扶南国との間に外交関係があつたことを述べている。すなわち、紀元後三世紀に扶南王范旃（Fan Tchan. 225-243）が蘇物 Sou-wou ふう人を中天竺（インド北部）に遣したといふことであるが、この内容は、當時交州（ハノイ）と広州の二州の刺史（州の督察官）であった丘岱が吳王孫權の命によつたと思われるが、宣化從事の朱応と中郎の康泰を扶南国に派遣し、彼らの帰國後あきらかになつたのである⁽²⁾。

ただこの『梁書』の記述はあくまでも公の使節のことと思え、南インドもふくめたインド諸国と扶南国間の民間貿易はさかんに行なわれていたのではなかつたかと思われる。とくに扶南の發展をみる時、紀元一世紀頃からインド諸国と中国間の南海を通じての貿易がだんだん発展していつたものと思える。本稿では次にこの『梁書』の記述に基いても當時の貿易航路について考えてみたいと願つ。

使節は扶南を出航し、投拘利 Teou-kiu-li に行か、その後投拘利の港を出航して大きな湾を西北の方向に進み、その沿岸に位置する数国をくて天竺⁽³⁾の河口にある港に到つたが一年ばかりかかつたといふ。ついにその江を七千里ばかり遡り都に到着した。これに関して、六世紀の『水經注』卷一、河水の条に引用するとこらの『康泰扶南伝』に、

拘利口、入大灣中正西北入、可一年余、得天竺江口、名恆水、江口有國、号擔株（あるいは袂）、屬天竺⁽⁴⁾。

とする。

すなわち、拘利の港を出て大きな湾を正北に進み、一年あまり後にインドの恒水（ガンヂス河）の河口に位置した擔株國に至つたといふことである。この記事の「拘利」は内容から考えて『梁書』の「投拘利」と同じ場所ではなかつたと考えられる。扶南の港をオケオの遺跡の近く、現在の Rach Gia 地方と考えれば、その方面から投拘利（拘利、マレー半島上に位置していたと思える）地方に行き、半島を横断し西岸の港からベンガル湾を西北の方に航行し、ガンヂス河口に至つたことがわかる。拘利について杉本博士は投拘利の省略形であらうとされる。また、P.Pelliot 氏は Sylvain Lévi 氏の考え方を紹介し賛同を示してゐる。わたくわく、Sylvain Lévi 氏によると、投拘利 Teou-Kiu-li はギリシャ史料（アレクサンダの地理書）の Milindapāñha （アーリンダ王の體）の中の Takola を示したものだ。しかし杉本博士によると「Milinda に從ふる Vanga ふ Cina ふの體とも Takkola は、

Vaṅga がベンガルである、Cina がシナド、中国であるのと、ハサフア中国との途中にあるのは明かである。しかばねインデル中國との途中における、それはこやれの刃であるのか。Ptolemaios の地図によれば、Takōla は、Exra Gangem India を、Aurea Chersonesus に繋がる陸路の、南方西海岸にあるので、その位置は、マラバ半島の周辺、Kra 地峡の南に求めなければならぬ。G. E. Gerini 出は、これが Takōpa かなわち Kopah と出定し、H. G. Quaritch Wales 出は、それを Takua Pa と訓する。Takōpa は、あらわす Takua Pa である。R. Braddell 出の「⁽¹⁰⁾」は、「⁽¹¹⁾」の座の方であつたらう「⁽¹²⁾」である。

以上の見解は G. Coedès 出の論及における研究者の間で、あるあるたる解説のが、G. Coedès 出は新説として P. Wheatly 出の見解を紹介してゐる。P. Wheatly 氏の説は、「拘利」はペルシャの Takkola のことではなくて、同じペルシャの ‘Koli’ を示してゐる。たゞマラバ半島東岸の Kuantan 沢の河口ではなかろうかといつものである。しかし、G. Coedès 出は「Takkola」の注では、P. Wheatly 出の Takkola を Trang 地方に位置してゐるところの見解は好論である。じ實(13) P. Wheatly 氏は『梁書』の投拘利を「投拘利」かなわち「拘利國に投す」と考へての見解のようと思われる。筆者は「投拘利」二字が地名で、ペルシャイヌスの Takkola のことであると考へてみた。Takkola が Trang 地方まで包んでいたのかどうかは不明であるが、Takua Pa を中心としたかなり広

い地域を示したものと取れる。ただ、筆者にはペルシャイヌス地方の写真を見るかぎり、Takua Pa の南部 Takua Thung 地方の方が適当なようにも思えるが如何であらうか。識者の御教示を頂きたい。

この投拘利は後代の史料に出てくる「伽古羅」、「可谷羅」と同じ国ではなかろうかと思える。八五〇一八六〇年頃の編と思える『西陽雜俎』卷十八には

丘藍(13) Cardamon 出伽古羅國、呼為多骨……

との記事は陳藏器の『本草拾遺』(開元年間、七一三—七四一年) と同じであり、八世紀まで遡るところである。多骨は、

Skt., kakkola>Pali, takkolam>sinkalese, takul

で、伽古羅 qâqulah は Cardamon のトゥブ名と考へられる。この Cardamon の原地名 takur はペルシャの ‘Takola’ と同じではなかろうかと考えられる。そして、時代は八世紀になるがアラブ人等を通じて得た知識をもとにして書かれたと思える賈耽 Kia Tan (730-805) の『道里記』にさ「可谷羅國」むらう地名で現われた。

以上のことから、一世纪中頃のペルシャの地理書の Takola はインド人を通じてギリシャ人等に伝わった名称と思へ、中国書の投拘利は中国人が扶南人もしくはインド人を通じて知ったのではなかろうかと思える。そして八世紀頃の伽古羅、可谷羅はアラブ・ペルシャ人等ペルシャ湾方面からやって来た人によつて中国に伝えられたものであらうと推定できる。

次に④の2の航路について考へてみたい。セイロン島方面から

マレー半島を横断し扶南に至る貿易航路がいつ頃確立されたのかはよくわからないが、マレー半島中部に位置していたと思える「狼牙脩（修）」國の記事から考へると、後で述べることになる五世紀の法顯の頃より以前であつたろうと思える。⁽¹⁶⁾ 以下、狼牙脩國の記事からひの点について考えてみたいと思う。

狼牙脩（修）國が中國の正史で最初に現われたのは『梁書』⁽¹⁷⁾（五十回）だと思える。いわく、

狼牙脩國在南海中。其界東西三十日行、南北一十日行。去廣州二万四千里。土氣物產與〔扶〕南略同。偏多綫・沈⁽¹⁸⁾・婆律香等。⁽¹⁹⁾ ……國人說立國以來四百余年。……天監十四年（五一）遣使阿撒多奉表。……

この文からは狼牙脩國の位置が明らかでないので、他書と比較してみたい。まゝ、『新唐書』卷一百四十七に、

盤盤國在林邑⁽²⁰⁾（ガ・トナム中・南部、チャンパ國）西南海中。北與林邑隔小海。自交州（交趾國、ハノイを中心）航行四十日乃至。其國與狼牙脩國為隣。人皆學婆羅門書。甚敬仏法。貞觀九年（七九三）遣使來朝、貢方物。

とあり、次に『新唐書』卷一百一十一下、盤盤國の條に次の記述がある。

盤盤在南海曲、北距環王（林邑國のひ）。唐代に一時環王國といい、のち占城國といふ。限少海與狼牙脩接。自交州海行四十日乃至……其東南有哥羅⁽²¹⁾、一曰箇羅亦哥羅富沙羅、王姓矢利婆羅、名失鉢羅（Cripārāmēçvara）、累石為城、樓闕、宮室茨以草、州二十一。

これら二書によると、狼牙修（『新唐書』）と狼牙脩（『梁書』）は両國のこと（以下狼牙脩と記す）、マレー半島に位置してゐたように思える。あなわち、狼牙脩國の東南に哥羅、一名箇羅國があると記す。哥羅は賈耽の『道里記』の箇羅國、九世紀のアラブ地理学者イブン・フルダーム⁽²²⁾の記す Kilah の島、同じくアラブ地理書『中國とインド物語』の Kalah-vāra 國のことと考えられる。箇羅國をケダーまたはそれより南方と考へると、その西北に位置するのが狼牙脩國であるとする。そこで、『梁書』の狼牙脩國を『新唐書』の狼牙脩國と同じ國だと考へると、この國は藤田豊八博士、G.Coedes 氏の説のように、シヤム湾上の Patani 地方とバンガル湾に面する Kedah 地方をコノトロールしていた國家であつたろうと考へられる。⁽²³⁾ また、狼牙脩國はマレ一年代記 'Marong Mahavansa' にみえる Lankasuka 國のことと思ふ。Lankasuka とは「ランカ人の國」という意味だと思ふ。Lanka とは元来セイロン島を示したものであつて思える。あなわちセイロン島は Lanka Dvipa (Diu) と呼ばれていたと思える。現在セイロン島は Sri Lanka 國と呼ぶられるが、これも「偉大なるランカ人の國」という意味ではなかろうか。高桑駒吉氏によると「Lankā は Mahābhārata にも記され、殊に Ramayana の叙事詩以来セイロンの一名となつてゐるが、元来 Rāksasa (羅刹、夜叉) の住処をいつのであって神話的名稱である。」⁽²⁴⁾ すなはち、アーリア人（セイロンの伝説によれば Cambay 湾附近に移住した初期の Ārya 族を Sihala' すなわち獅子族と云つたと云う）と異なり Drāvida 族の住む島を

言つたものと思える。

それではランカ人の国であるセイロン島（師子國、*Lanka Dvipa*）とマレー半島中部に位置していたと思える狼牙脩（*Lankasuka* 国）とは何らかの関係があるのであろうか。それは西国ともに「ランカ人の国」ということを意味していると思えるからであるが、それらの関係はよくわからないように思える。ただ、九世紀のアラブ地理書『中国とインド物語』の中でニコバル諸島がランガ・バールース *Langa-balūs* という名称で述べられていてことが興味をそそられる。*Langa-balūs* とはバールース国（州）（あるいは（國））ともいう意味と思われる。バールース国とは九世紀アラブ地理学者イブン・フルダードベーの言う *Balūs* の島のこと（スマトラ島西北部）⁽²⁵⁾を示している。中国史料の「婆露國藍伽洲」のことと思える。⁽²⁶⁾ ランガ・バールースという名称から考へるとニコバル諸島に住む住民もランカ人と言われたのではなかろうか。そうすると、セイロン島、ニコバル諸島、マレー半島中部の *Lankasuka*（狼牙脩）国（三国ともにランカ人と関係ある国ではなかつたろうかと思えるが如何であろうか。『梁書』の狼牙脩国は後に狼牙須（『隋書』）、凌牙斯加（『諸蕃志』）等と記述された。

以上のことから「師子國（セイロン島）—狼牙脩」間の貿易航路の存在を知ることができるが、さらに「狼牙脩—扶南」の航路にむすばれていたようと思える。たとえば、義淨の『大唐西域求法高僧伝』（卷上）、義朗律師の条に次の記述がある。

既至烏雷同附商舶、掛百丈陵万波。越舸扶南、綴纜郎迦戌、（二

狼牙脩）。……與弟附舶向師子洲。……

すなわち、大船（舸）で扶南に行き、その後郎迦戌国に入港（繰續。出港は解續という）し、郎迦戌から師子國へ舶で向つたといふ。

(b) (四) 閩婆經由の航路

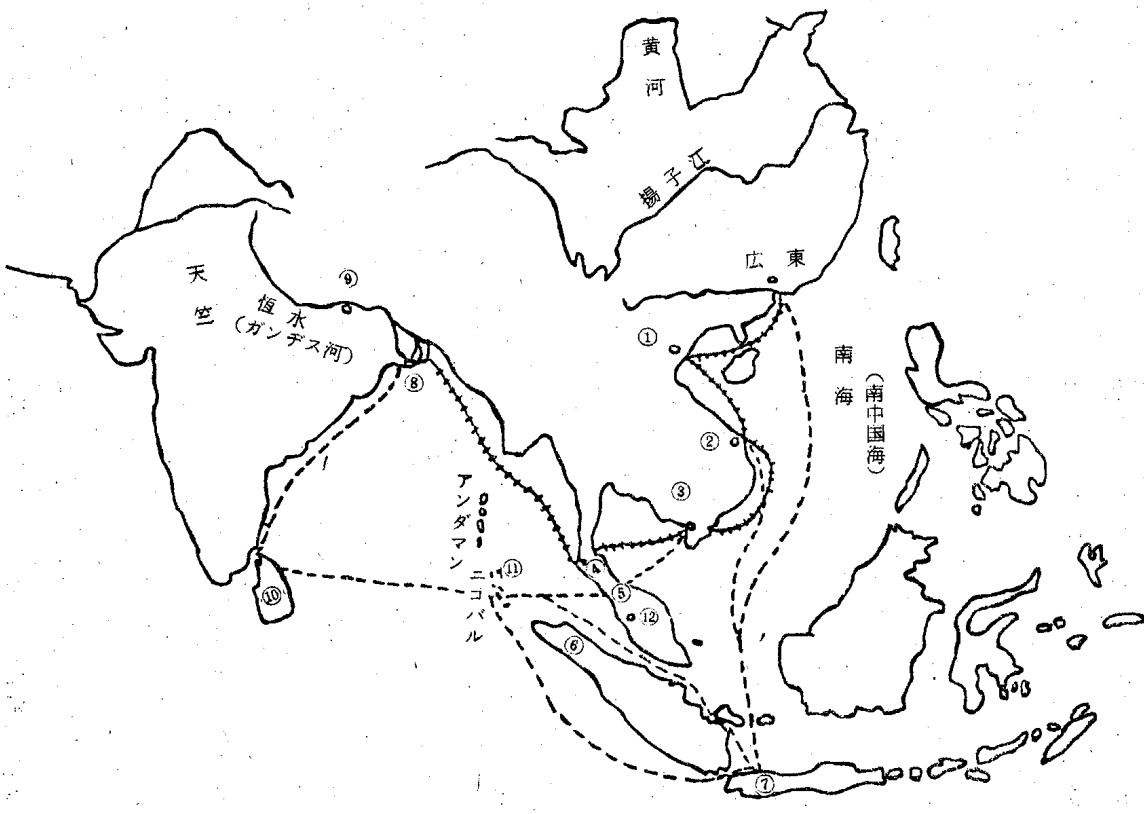
中国の廣東へ行くには(a)で述べた扶南經由の航路の他に、たとえば南インド・セイロン島方面からベンガル湾、マラッカ海峡をへてジャワ島に至り、ジャワから廣東への直航路もしくは林邑等に寄港し廣東に至るルートが存在していたと思える。これらについては第四章で述べたいと思う。

(2) 室利仏逝・三仏齊時代の航路

貿易中継国家であった扶南の滅亡後、貿易國家として発展・繁栄したのがスマトラ島東南部パレンバン地方を中心とした国家「室利仏逝」であったと思える。

室利仏逝国についての正しい知識を中国につたえたのは義淨が最初だと思える。義淨がインドへ出発したのは咸享二年（六七一）、三十七才の時で、彼の『大唐西域求法高僧伝』と『南海寄帰内法伝』にマレー諸島、インドについての記述がある。義淨は咸享二年（六七一）の十一月に廣東の港を「波斯舶（たぶんペルシャ人所有の大型船であろう）」で出航し、スマトラ島のパレンバン（仏逝国）に至つたが、航海日数は二十日からなかつたという。仏逝国に六ヶ月滞在し仏教を学んだ。その後西方に位置する末羅瑜（マラユ）国に行き、二ヶ月滞在し、次にマレー半島南部の羯荼国（ケダーもしくはそれよりも南部）に至つた。羯荼が

図I 扶南時代の航路略図 (A.D. 2 C~6 C頃)



- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| ① 交趾国 | ⑧ 多摩梨帝国
Tāmalitti |
| ② 林邑国 (Champa) | 担秩国 |
| ③ 扶南国 | ⑨ 謄波国
Champa (Bhāgalpur) |
| ④ 投拘利港
Takōla | ⑩ 师子国
Lanka |
| qāqulah | |
| 哥谷羅 | |
| 伽古羅 | |
| ⑤ 狼牙脩 (修)
Langasuka | ⑪ Langabālūs
婆露国藍伽洲 |
| 郎迦戌 | |
| 狼牙須 | |
| ⑥ bālūs
婆露国 | ⑫ 箇羅
哥羅 |
| 婆律国 | 哥羅富沙羅
kilah |
| ⑦ 閻婆国 | Kalah-vāra |

「⁽²⁸⁾」裸人國（たぶんアンダマン諸島の意）をくて耽摩立底國 Tāmalipti（ガンドス河口に位置した國）と至った。咸寧四年（六七三）のことであった。

室利仏逝はマレー語碑文に述べてある Crivijaya の対音と照える。⁽²⁹⁾桑田博士によれば「高楠博士が南海寄帰伝を翻訳された頃には読み方もハツキリしなかつたが、後に刻文が発見され G. Coedes が Crivijaya 國と読むべきを提唱されたから、今田では一般にこの説が行はれてくる。その都は Palembang である。」⁽³⁰⁾ しかし、その意味につき杉本博士は「室利又は尸利は、ヒュマドもなく Cri (Sri) の対音で、これは Chavanes のこえる如く——國名の一部をなすものでなく、ただ君主・國家・寺院などの名の前に置かれる、梵語の敬称に過ぎぬ——のであるから、仏逝或は仏誓が、主たる國名をなす訳である。」⁽³¹⁾ とされる。このように仏逝と室利仏逝の両方が國名として使用されていたようであるが、Vijaya はサンスクリット語で都市あるいは町とうう意味と思われるのと、仏逝を Vijaya の転写と考えれば、vijaya の上に ‘Cri’ が加えられて「偉大なる都市」すなわち室利仏逝 (Crivijaya) と呼ばれたのであらう。

前述した義淨の航路は「廣東——ペレンバン——東インド」の旅程であったが、義淨より一世紀ばかり後の賈耽（七三〇一八〇五年）の『道里記』（『新唐書』卷四十三所収）に廣東からセイロン島・南インドをくぐてペルシヤ湾に入る航路についての記述がある。ここでは廣東からセイロン島までの旅程を考えてみたいと思う。『道里記』にいわく、

……至奔陀浪 Pen-t'o-lang 灣 (カムナム南部 Panduranga)、又西日行到軍突弄 Kium-t'ou-nong 又五日行海破、蕃人謂質 (マラカ海峡。マレー語・Sélat→アラブ語。surr→中國語・質 Tche)。南北百里、北岸則羅越 Lo-yue 国、南岸則仏逝 Fo-che 国、仏逝國東水行四五日行至詞陵 Ho-ling 国 (ジャワ島内に位置した國)、南中洲之最大者。又西日破三日至葛葛僧祇 Ko-ko-seng-tche 国、在仏逝西北隅之別島、國人多鈔暴、乘舶者畏憚之。其北岸則箇羅 ko-lo (マレー半島ケダ一またはその南方)。箇羅西則哥令羅 ko-kou-lo (前述アトノマヤ太々の Takola) 国。又從葛葛僧祇四五日行至勝鄧 Cheng-teng 洲。又西五日行至婆露 P'o-lou 国 (スマトラ島西北部。アラブ史料にバールースの島とある)。又六日行至婆露國藍伽洲 (原文は婆國伽藍洲に作る。ニコバル諸島である)。アラブ史料の Langa báluś、すなわちバールース國のランガ洲の音訛と思ふ)。又北四日行至師子國 (セイロン島)、其北岸距南天竺大岸百里。………

まだ比定されていない地名もあるが、廣東からセイロン島までの航路はよく理解できるように思える。すなわち、「廣東——奔陀浪洲 (ペンダウランガ) —— 仏逝國 (ペレンバン) —— 婆露國 (バールースの島、スマトラ島西北部) —— 婆露國藍伽洲 (ニコバル諸島) —— 師子國 (セイロン島)」といつ航路が存在しているようである。また、賈耽の記事はアラブ人等の知識にもじいて書かれたように思えるので、次にアラブ史料と比較したいと思ふ。

が、九世紀のアラブ地理学者イブン・フルダーディー Ibn Khordādbeh (844-848) の記述によれば、Sirandib (錦子国、ヤイロハ島) から Langabālūs (リコバル諸島) までの旅程は 10~11日であるといふ。そしてついにランガ・バールースか Kilah (=kalah) の島から箇羅国へ六日間航行する。⁽³⁴⁾ キラーの島から中国への旅程についてとは同書に次のように述べてある。

「Māyt (長明) を出発して左方に Tiyūma の島 (マレー半島東南 Endou の東方海上にある Tioman 島とされる) がある。この島にはその地の樹葉で ‘hindī’ と呼ばれる沈香 bois d'aloès と龍脑 camphre が産する。この島から五日間航行すれば Khmer (真臘國) に至る。この國では ‘kimārī’ と呼ばれる沈香と米を産する。クメール Khmèr からチャンパ Campa (占城國) へは海岸に沿って航行する。11日の旅程である。チャンペの沈香は ‘canfi’ という名で知られ、クメールの沈香よりも良質である。これらは水に入れると底に達するからである。すなわち重くて上質なのである。チャンペには牛と水牛がある。チャンペから中国の最初の寄港地であるルーキー Lūkīn (交州の龍編・Lung-pin) までは陸・海路とともに 100 パラサンチ parasanges の〔距離〕である。」

以上の諸港までの旅程について次のよう�述べてある。「ルーキンには上質の中国鉄と磁器 (terre vernissée) と米がある。ルーキンから大きな港であるカフンホー Khanfou (広府・廣東) に至る。海路で四日、陸路で 110 日かかる。カ

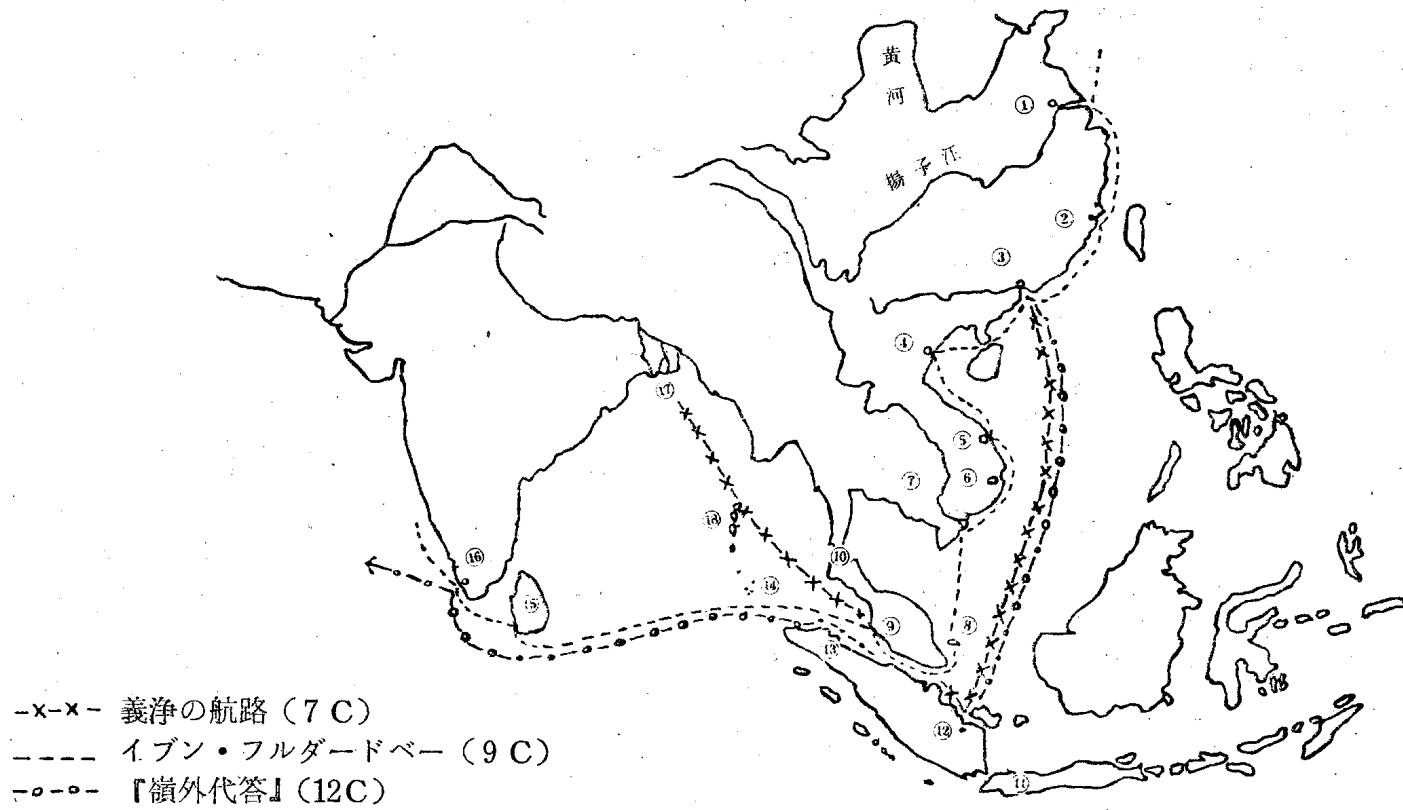
法顯『仏國記』の南海航路考・上

アンフォートにはあらゆる種類の果物と野菜、小麦、大麦、米、砂糖、キビが産する。カアンフォートから八日間でジャンパー Dianfou (泉州⁽³⁷⁾) に至る。ジャンパーにはカアンフォートと同様な産物がある、ジャンパーからカントウ Kantou (江都、揚州) ⁽³⁸⁾ までは六日の〔旅程〕である。カントウにも同様の産物がある。中のすべての港には航行可能な大河があり、潮汐の影響がある。カントウの河には鳶鳥、あひる、その他の鳥がいる。」⁽³⁹⁾

イブン・フルダーディーと同じ頃のアラブ史料『中国とインド物語』(851) にもペルシャ湾から中国への航海についての記述がある。それによると、インド西南岸のクラーム・マラヤ (キーロン、宋代の故臨國) からランガ・バールース (リコバル諸島) をくぐり、マレー半島のカラ・バラ (箇羅國) に至り、さらにテューマン島、ペアンドゥランガ (ヴェトナム南部、賈耽の奔陀浪洲)、チャンペ (占城國) ⁽⁴⁰⁾ から漲海 (南海と同じ意味、南中國海) を航行し広東に至っている。この場合はチャンペから外洋を航海し、直接広東に至ったものと思える。

義淨の時代の室利仏逝国はインド諸国と中国との間に位置する中継貿易国家的性格をもつていたようと思えるが、このスリ・ヴァイジャヤ国は宋代になると「三仏齊」国と呼ばれるようになり、インド諸国のみならず、アラブ・ペルシャ方面 (大食国) からも貿易商人が多くやって来た。そして中国へ行くにはかなはず「三仏齊国 (パレンバン中心)」に寄港し、からに広東に至ったといふ。たとえば周去非の『嶺外代答』(一一七八) 卷二「三仏齊の條に、

図II 室利仏逝・三仏齊時代の航路



- ① Kantou 揚州 (江蘇)
- ② Djanfou (泉州)
- ③ Khanfou (廣東)
- ④ Lükìn (交州の竜編)
- ⑤ Champa 占城国
- ⑥ 奔陀浪 Panduranga

- ⑦ Khmèr 真臘国
- ⑧ Tiyūma (Tioman 島)
- ⑨ Kilah (=kalah) 竷茶, 箇羅
- ⑩ 哥谷羅
- ⑪ 閻婆
- ⑫ 仏逝国, 室利仏逝(Crivijaya), 三仏齊

- ⑬ Bālūs 国
- ⑭ Langa bālūs 国 (ニコバル諸島)
- ⑮ Sirandib 細蘭
- ⑯ 故臨 (Quilon) Koulam-Malaya
- ⑰ 耽摩立底国
- ⑱ 裸人国

三) 仏教國在南海之中。諸蕃水道之要衝也。東由闍婆(ジャワ)

島) 諸國、西大食(アラブ諸國)、故臨諸國無不由其境而入中國者。

ところ一文からもわかる。ただ、カンボジア地方に扶南國が栄えていた時代(紀元一~六世紀頃)には事情を異にしていた。扶南の時代には室利仏逝國の存在はなかつたようと思え、インド諸国からの貿易船は前述したように北インドのガンヂス河口からマレーハン島北部タローラを通り、扶南に至るか、南インド・セイロン方面からマレーハン島中部の狼牙脩國をへて扶南に至るのが主なコースだったようと思える。そして今一つの航路が三・四章で述べられたことになる五世紀、法顯の時代の航路についてである。すなはち「闍婆經由の航路」について考へてみた。

(15) 擔株國は杉本博士によると、「擔株の古音は Tām-dit のノルマを有つて、だい新定される。……〔ノルマ〕 Tām(a)lit(ti) または Tām(a)lit(ta) と比定されるべきではなかつた。扶南の Pāli 名 Tāmalitta は、丘陵地、Mahānāma ともいふ Pāli 語で書かれた、Mahāyāna (xlv) の廿二の記」と、「多摩梨帝」と訛してゐるが、その『法顯』(法顯記) は、「多摩梨帝」と訛してゐるが、訛して Pāli 名 Tāmalitti の対音である。

（2）「海南支那」(海南島) (=『法顯』) の版本については、長沢和俊氏訳注『法顯傳・宋靈行紀』昭和四六年、一一〇五—一二七頁、を参照のこと。

註

(1) 石田幹之助『南海に関する支那史料』昭和二〇年、七一

(6) 杉本『東南アジア史研究』三七九頁。

頁。以下「南海支那」とす。『法顯』(=『法顯』) の版本については、長沢和俊氏訳注『法顯傳・宋靈行紀』昭和四六年、一一〇五—一二七頁、を参照のこと。

(7) P. Pelliot, "Deux Itinéraires de Chine en Inde, à la fin du VIII^e siècle," *Bulletin de l'Ecole Française d'Extreme Orient*, IV (1904), p. 386.

(8) P. Pelliot, "Le Fou-nan," *Bulletin de l'Ecole Française d'Extreme Orient*, III (1903), pp. 248-303. G. Coedès, *Les peuples de la Péninsule Indochinoise* (Paris, 1962), pp. 61-66.

(9) 石田幹之助「海南支那」(海南島) Lat. VF. 32 • ノルマ caise d'Extreme Orient, III (1903), pp. 248-303. G. Coedès, *Les peuples de la Péninsule Indochinoise* (Paris, 1962), pp. 61-66.

(10) 石田幹之助「海南支那」(海南島) Lat. VF. 32 • ノルマ caise d'Extreme Orient, III (1903), pp. 248-303. G. Coedès, *Les peuples de la Péninsule Indochinoise* (Paris, 1962), pp. 61-66.

(11) 鄭道元、水經注、第六册、国学基本叢書、中華民國五十七年(1946)、上海人民出版社。

年)。

- (9) 杉本、前掲『東南アジア史研究』三七九—三八〇頁。
(10) G. Coedès, *Les États hindouisés d'Indochine et d'Indonésie, nouvelle édition revue et mise à jour* (Paris, 1964), p. 80.

(11) P. Wheatley 出の総譜は Roland Braddell 出の藤田豊

八博士の訳解に基いていたものである。P. Wheatley 出が R. Braddell 出の「拘利ばアムニーの Koli」と一致する」ふるべの説を紹介し、同出の『深書』と『水經注』

の旅程についての説明の不十分なのが藤田博士の見解で説明である。すなわち、P. Wheatley 出は「藤

田豊八氏(何氏訳本にモヒル)は『深書』の投拘利の三字を地名(place name)とは読みず、「投」を動詞すなわち『to go toward』と読みてゐる。私はも動詞として読んだ方がよろしいと感心する。」ふるべ内容を述べてある。

藤田博士の原文は、「ふるべ拘利の上に投字はあるのである。ただ拘利は扶南より金隣大湾を渡りて三千里の南にあり。」ふるべ『徒扶南發投拘利』は發あやを一句とし、扶南より發し、拘利口に投あと読めぬでない。更に詳

しく扶南より發し、金隣大湾を渡り三千里南して拘利口に投あと解せぬでない。ただ水經注に發拘利口ふるべ光明に投の字を略したと見るがよからぬ。」ふるべ。

P. Wheatley, "Belated Comments on Sir Roland Brad- dell's Studies of Ancient Times in the Malay Penin-

sula," *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* (1954, Singapore), vol. 28, pt. I, p. 98.

藤田豊八著・何健民訳『中國南海古文交通叢書』(一九三一)、(一九三二)年、上海)。筆者は何氏訳本は参照してみた。

藤田豊八「前漢に於ける西南海上交通の記録」(『英文』第 1 ○・1 号、大正三年)『東西交渉史の研究』・南海篇所収、昭和四十九年版)、101—1011 頁。

(12) パンナマイオヘの地図は(注18) どもいた。P. Wheatley 前掲書(注11)、八五頁の地図参照。

(13) 段成式、酉陽雜俎、和刻本漢籍隨筆集・第六集(汲古閣刊)、昭和四十九年十一月、一六六頁。白茎慈についてとは曰田憲太郎氏『東亜香料史研究』(昭和五十一年一月)、三三一—三三五頁を参照のこと。

(14) 杉本直治郎「羅越國問題」(昭和十一年 10 月、『王』先生還暦記念・東洋史論文集所収)、昭和十三年、四九(三三五)頁。ペリネ氏注(15) 譜文。

(15) P. Pelliot, "Bulletin Critique: Friedrich Hirth et W. W. Rockhill, *Chau Ju-Kua*, *T'oung Pao*, 13 (1912), pp. 453-455.

(16) 狼牙脩国研究についての学説は本稿では省略したが、口に挙げて解せぬでない。ただ水經注に發拘利口ふるべの主な参考譜文は次の通りである。

藤田豊八「狼牙脩国考」(『東洋學報』第 11 卷第 1・2 号、大正 11 年)、前掲『東西交渉史の研究』・南海篇所収)、1—117 頁。

高桑駒吉「赤土國考」(『史學雜誌』第三十一編第六号、大正九年)、四三七—四五八頁。

宮崎市定「狼牙脩國と狼牙須國」(『羽田博士頌寿記念・東洋史論叢』、昭和二十五年十一月。『アジア史研究』卷四所収、昭和三十九年)、三八八—四二一八頁。

荻原弘明「唐代新嘉波名称考——附。宮崎市定博士の『狼牙脩國と狼牙須國』についての疑問——」(『鹿児島大學文科報告』II、一九五八年)、九九一—一六頁。

(17) 稲・沈は棧香・沈香のこと。棧香も沈香と同樹から取れるが、沈香よりもおとるものをいう。山田氏、前掲、『東亞香料史研究』、一六八—一一八頁参照。

(18) 婆律香は婆律國に產する香といふ意味。婆律國は九世紀のアラブ史料に現われる Balūs の島のことだ、現在のスマトラ島西北部地方を示していると思われる。婆律香は唐代に竜腦、宋代に脑子と言われる。現在英語で Camphor と言われる。竜腦には二種類があるが、九世紀の『酉陽雜俎』には竜腦樹から取れる結晶体を竜腦、同じく液体を婆律膏としている。『梁書』の婆律香には結晶体も包んでいたものと思える。もともと婆律國に產することから婆律香と呼ばれていたものが、後に「竜腦」という中國最高の名前がつけられたのではないかと思える。池永「諸蕃志」の賓寧國と竜腦

(19) P. Pelliot, *ibid*, Deux Itinéraires, p. 350.

(20) 池永、前掲、賓寧考・前篇、三七一—三〇〇頁。池永、麻離拔考・丁、三五一—三六頁。カレーの位置は確定していないが、おもいへペリオ氏(注15の論文、四五三頁)の見解のようにケダーカムラッカの間の某地であつたかもしない。

(21) 藤田、前掲、南海篇、三三〇頁。G. Coedès, *ibid*, *Les États hindouisés*, p. 79.

(22) G. Coedès, *Les États hindouisés*, p. 79. 繩田六郎「*仏教考*」(名古屋帝國大學文政學部『史學科研究年報』第三輯、昭和十一年)、一六(14) —— 一七(15) 頁。

(23) 高桑駒吉『大唐西域記に記せる・東南印度諸國の研究』(大正一五年七月、昭和四九年一一月復刻)、三六一—三六二頁。

(24) 高桑、前掲、『東南印度諸國の研究』、三四一—三四二頁。

(25) 池永、賓寧考・前篇、三七一—三〇〇頁。池永、麻離拔考・丁、三五—三六頁。

(26) または、セイロン島方面からインド洋を経て、直接スンダ海峡に入り、ジャワ島に至るルートがマレー諸島人の間では利用されていたかもしれないが、不明。スンダ海峡路は中國史料、アラブ史料にはあらわれていないようと思える。

(27) 池永、麻離拔考・丁、三〇一—三一頁。

(28) 池永、麻離拔考・丁、二九一—三〇頁。

(29) 桑田六郎「南洋上代史雜考」(大阪大學『文學部紀要』第三卷、昭和二九年)、三一(三三三)頁。

(30) 杉本「羅越國問題」、四九(35)頁。

- (31) 賈耽『道里記』の地名出走はむし。P. Pelliot, *ibid.*, Deux Itinéraires, ともいだ。賈耽著述の地理書じつじは、榎一雄氏「賈耽の地理書と道里記の称とに就く」(『歴史学研究』六・七号、昭和十一年)、七九九一八〇六頁、を参照のこと。
- (32) 池永、賓率考・前篇、三七一四〇頁。
- (33) 池永、賓率考・前篇、三七一九頁。
- (34) 池永、賓率考・前篇、三八一三九頁。
- (35) 桑原隠藏『唐宋時代に於けるアラブ人の支那通商の概況殊に宋末の提挙市舶西域人・蒲寿庚の事蹟』(大正十一年七月、昭和一〇年一一月増補版、『桑原全集』第五卷、昭和四二年に刊行)、三九一四〇頁。
- (36) G. Ferrand, *Relation de voyages et texts géographiques arabes, persans et turcs relatifs à l'Extreme-Orient du VIII^e au XVIII^e siècles* (Paris, 1913-1914), vol. II, pp. 21-33.
- (37・38) 桑原、前掲、『蒲寿庚の事蹟』、四〇一四一頁。
- (39) C. Barbier de Meynard, "Le livre des routes et des provinces, par Ibn Khordadbeh, publié, traduit et annoté," *Journal Asiatique* (1865), pp. 292-293.
- (40) 池永、麻羅拔考・丁、三四一三七頁の翻訳文による。